

エジプト・クルナ村私人墓で発見された彩色布片の繊維特性について  
 昭和廿六家政 犬野泰雄 昭和廿六短大 蘭地美知子 ○保崎恵美子  
 昭和廿六家政 小原奈津子

目的 古代エジプトのミイラに用いられた織布断片の繊維特性を調べ、その劣化の機構を明らかにするものが本研究の最終目的である。本研究では、まずオシリス神などが描かれた彩色布片の繊維原料、織構造、繊維特性などを明らかにすると共に、さらに素材、織糸番号の近似した織物を復元し、これと比較検討を行い、劣化の状態を明らかにする。

方法 試料は、早稲田大学古代エジプト調査委員会より提供されたもので、エジプト・アラブ共和国ケナ州ルクソール西岸クルナ村のシェイフ・アブド・アル・クルナ地区の岩窟墓から発見された織物の断片(試料EW1)である。比較試料としては素材、織糸番号の近似している織物を復元(復元試料a, b)し、比較検討した。織物の構造に関する測定、織糸、織物の強さ及び伸度などは、基本的には一般織物試験方法(JIS L1096)に準じて行った。

結果 試料EW1は平織で、亜麻繊維(現在の亜麻繊維の形態と多少異なるところがある)とほぼ同定できる。試料EW1の織糸の引張強さは、f糸(6.76g)は、復元試料a(3600g)の約 $\frac{1}{390}$ 、よこ糸(7.53g)は、復元試料b(1300g)の約 $\frac{1}{170}$ で、また、織物の引張強さ(f糸1.80kg よこ糸0.95kg)は、復元試料a(70kg)及びb(37.5kg)の約 $\frac{1}{40}$ である。試料EW1の織糸の引張強さの低下が著しく、劣化していることを示している。これに対し、織物の引張強さは織糸ほどには低下していない。このことは試料EW1の表面の彩色に用いられた顔料、樹脂のような物質が付着しているため、f糸、よこ糸が交差している間隙にも入り込み、見掛けの引張強さを補強しているものと考えられる。